村史こぼれ話 20

白土生産工場

旧県道新潟寺泊線（現村道浅尾線）の浅尾・矢楯地内道路の切り通しに「白土」の堆積層が露出しています。このあたりには、太平洋戦争中の昭和 18～9 年（1943～4）に設立された北越白土工業所という白土の生産工場がありました。創業者は長岡市出身の清水勇作さんで、大きな建物が 2 棟、乾燥工場（巨大な煙突があった）と粉末工場があったのをまだ記憶している方はおいでになるでしょう。工場では白土堆積層を掘り起こし、トロッコで 100ｍくらい離れた工場へ運び入れました。夏場は天日干し、冬場は石炭を燃やして室内を乾燥し、機械で粉末処理して製品にしたそうです。従業員たちは「猫車」で白土を運び、細かく砕いてムシロの上に広げるのが主な仕事でした。従業員は 8～10 名ほどで、ほとんどが工場近辺の人だったそうです。

白土の成分は苛性ソーダ（水酸化ナトリウム）で、水に溶けやすい白色のもろい固体です。粉末の白土は俵詰めにして糸魚川市（旧青海町）の「日本曹達㈱」などの化学工場に出荷されました。また石けんの材料として、当時クレンザーなど洗剤の製造をしていた三条市の「丸福」にも出荷していました。戦後の昭和 25 年頃からは土壌改良など農業用として新発田や旧北蒲原方面の農家に出荷されたそうです。

天日干しする工場の広場は休日になると子どもたちの格好の遊び場でもありました。戦中、戦後の物不足の時代、石けんの代用にと、近郷から白土を取りに人々が押しかけたため、土が崩れてけが人も出たことがありました。

昭和 30 年代に入り、日本の工業生産が回復するに従い、白土の需要は次第になくなり、工場は自然消滅の形で廃業されました。それから約 50 年経った昨年、跡地の一部に移動通信用アンテナが建てられました。

資料提供：富田功さん（弥彦）